

水の特性を巧みに生かす

―地域資源の総合プロデュースを―

多彩に変化する水辺の景

水辺ほど様相が変化する対象はない。鏡のごとく月を映し出す水面ばかりではなく、北斎の代表作・神奈川沖浪裏に描かれている景、とうとうと流れる大河を眺める水辺や歓声とともに急流を下る活動の景、古今東西の鑑賞対象としての滝、山間地に突然生まれたダム湖等、その活用を総論として論ずるには多彩すぎる。気象との関係で刻々と様相が変化するのも水の景の特徴である。

観光との関わりをみても、眺める、近づく、触れる、入る、流れに身をおくといった体験のみならず、港町や河岸、城下町の堀割等、地域の成立ちは水辺が大きく関わりを持って今日に至っており、時間の流れをさかのぼって往時をイメージして地域を見たときに新たな光景が目当たりに見え隠れすることもある。

本稿では、このような多彩な水辺の景の特性を踏まえた上で、水辺を生かした事例から観光まちづくりの推進を先導するに倣っていただきたい考え方を論じたい。

「浜大漁に岡万作」をテーマに

千葉県九十九里町は、新全国総合開発計画では大規模レクリエーション基地が構想される等、海水浴場として著名な地域である。海水浴場としての歴史は長く、1910（明治43）年に片貝海水浴場に地元の向上会の手により無料休憩所も開設された。徳富蘆花との交流や高村光太郎の妻・智恵子が療養する等、浜辺の特性を生かした通年型の地域活力向上に向けた戦略に早くから取り組んでいた。

九十九里浜一帯は平坦と思われるが海岸線に沿って微地形を有する地域であり、もともと

筆者プロフィール

大下 茂氏

（おおしも・しげる）

東京工業大学大学院博士課程修了。技術士（建設部門 都市及び地方計画）、博士（工学）。

1989年9月に㈱プランニングネットワークを設立後、2001年より東京工業大学工学部、立教大学観光学部兼任講師。2012年4月帝京大学経済学部観光経営学科教授、2024年3月に退任、現在に至る。2014年4月、内閣府の地域活性化伝道師に登録。専門領域は、『集客』・地域の視点での観光まちづくり（地域の記憶と市民協働）。（公財）利根川・荒川水源地対策基金評議員、東京都観光事業審議会会長、市町村の総合計画審議会会長等も兼務。



（株）K-I-T-A-B-A相談役・
内閣府地域活性化伝道師

● 大下 茂



図 ワークショップで導かれた九十九里町の地域資源コンセプトマップ
出典：拙著「集客まちづくり」の技術、p70、学陽書房

とは内陸に農耕を主とする集落が形成（「親集落」と称している）され、その後、新田拡大のための「子集落」が海岸線と親集落の間に広がり、最後

化活動を総合プロデュースした観光まちづくりの展開を模索することとした。地域の成り立ちにまさかのぼって地域資源を再発見した取り組みは、他の地域も倣うことができる思考であると言える。

観光振興プランの重点戦略に

現在浅草からスカイツリーにかけての地域には多くの訪日外国人観光客が往来しており、隅田川に架かる吾妻橋上で写真撮影をしている観光客も多い。橋上や橋詰広場は、まち歩きを楽しんでいる観光客にとっては、連続するまち歩き体験の中で、変化するリズム感と開放感が得られる恰好の撮影スポットである。また、隅田川を行き来する水上バスは、乗船体験も楽しみであるが、河面に変化と動きを生み出す撮影対象の一つでもある。

2023年は、関東大震災から100年を迎える年であった。関東大震災の復興と言え、すぐに帝都復興院総裁として尽力した後藤新平氏を思い起こす。中でも、隅田川をバリのセーヌ川にたとえ、復興橋梁をさまざまな形状の橋として架けることで、復興後の首都としての高い格付けと都市文化度の確立、さらに現在で言う都市観光の推進をイメージしたのである。新しく架橋された9橋とは、下流から相生橋、永代橋、清洲橋、両国橋、蔵前橋、既橋、駒形橋、吾妻橋、言問橋であり、現在も当時の形状のまま、観光客を迎えている。この100年前の帝都復興・都市形成に対する熱い思いが、そぞろ歩きやパークルーズを楽しんでいる訪日観光客にも伝われば、観光体験に

格別の想い出や物語が加わることとなる。

また、今年2024年は荒川放水路通水から100年を迎える。現在の隅田川沿いのリバーウォークを安心・安全に楽しめるのも、この治水事業があつてのことである。周年事業を迎えるにあたり、国土交通省関東地方整備局荒川下流河川事務所が音頭をとって、東京都と沿川2市7区による荒川放水路通水100周年記念事業がスタートしている。この一つの自治体である北区は岩淵水門（青水門・赤水門）が観光対象となっており、花火大会を荒川河川敷で開催する等、地域にとって貴重な観光スポットとなっており、周年事業に対して大学生をはじめとする地域住民が加わり、参加型のさまざまなプログラムが企画・実践されている。興味深い取り組みではあるが、残念なことに観光客を始め沿川住民には情報があまり伝わっていない。

河川は、多くの場合、国や都道府県が管理していることが多く、非常時の治水管理の観点から河川利用の諸手続は煩雑であり、観光の活用へのハードルが高いと思われる。加えて、地域にとっては、国・都道府県との馴染みも薄い。そこでその橋渡しとして期待されるのが地元自治体である。地方自治体では、独自に観光振興プランを策定していることが少なくない。隅田川沿川地域の墨田区では「墨田区観光振興プラン」の五つの基本戦略の一つに「水都すみの再生」をうたい、隅田川（東京都管理）の積極的な観光活用に取り組んでいる。北区では「北区観光振興プラン2023」の重点戦略の一つに「水辺を活用した観光コンテンツの充実」を掲げ、特に荒川河川敷（国

管理」の活用を、公公連携・公民連携の下に進めることを明記している。

観光客等にとって自治体と河川管理者との関係、所掌業務の分担は関係ない。利用者目線で地域関係者が一体となった取り組みの第一歩は、マスタープランとなる観光振興の計画に重点的に取り組み旨を明記し、位置づけを与えることから始められるのではないだろうか。

舟運を現在に再現

かつて多くの旅人の移動手段は河川を使った舟運であった。旅の自由化が実現するのは江戸中期以降であり、江戸を拠点とした庶民向けの行楽地として成田詣がブーム化した。2泊3日の行程が一般的であるが、時間的・金銭的に余力のある旅人は、木下河岸から利根川を下り、東国三社詣を楽しんだ。東国三社とは、古い歴史を有する香取神宮（千葉県香取市佐原）、鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）、息栖神社（同神栖市）の三社であり、近年ではパワースポットとして脚光をあびている。

利根川下流の右岸に位置する千葉県香取市佐原と、左岸の茨城県潮来市・鹿嶋市の三市が県境を越えて水郷三都観光推進協議会を設立したのは2005年であった。古くから水郷地帯と称されていたことを縁に連携を仕掛けたのである。仕掛け人であった佐原は、江戸時代中後期には、利根川舟運の河岸（川港）として「江戸優り」と言われる程の活況を得ていたものの地域活力の低下が顕著にみられ、舟運として利用されていた小野川、古い町並み、夏と秋の山車行事は、地域では「三

悪」と呼ばれていた。佐原商工会議所の当時の会頭・小森孝一氏は、「ないものを嘆かずあるものに磨きをかけるまちづくり」をかけ声に、小野川の再生のための清掃活動と舟運の復活を試み、集客を実現したのである。水郷三都観光推進協議会の設立後は、成田空港との近接性を活かし、緒についたばかりの訪日外国人観光客誘致として、韓国、台湾、香港、オーストラリアなどの旅行社やメディアの誘致に加え、そのコンテンツの一つとして東国三社詣をイベントとして復活させたのである。

城下町は水活用アイデアの宝庫

城下町の造営においては、水は防御機能に加えて市中に生活用水を回すことの意味合いが大きかった。小藩ではあるが、織田信長の二男・信雄が宗家として形成した小幡藩（群馬県甘楽町）では、一級河川雄川から引き込んだ「大堰」と、この堰から取水し陣屋内に回されている「小堰」から成る「雄川堰」が水網のように張り巡らされている。城をもたない特徴的な城下町である。雄川堰は、現在も地元住民が愛着と誇りをもって継承・管理しており、藩政時代からの姿を残している。観光地としての著名度はそれほど高くないものの、雄川堰は「日本名水百選（環境庁『当時』）」「水の郷百選（国土庁『同』）」「水百選（農林水産省）」の認定や「土木学会選奨土木遺産」に選定されている。本物を追求している甘楽町や地域住民にとって雄川堰そのものが地域の自慢であり、文献史料に基づいた復元を加えた歴史風致の地域とし

て、文化度を感じてほしい観光客を迎える観光まちづくりを志向して取り組んでいる。

国宝・松本城を有する松本市では、登城する観



再生された小野川舟運（千葉県香取市佐原）



市中に張り巡らされている雄川堰は地元自治体により日常的な管理がされている（群馬県甘楽町）

光客に対して、新たな観光体験の情報を発信している。その一つが湧水である。松本市街地中心部には、場所によっては都心のコンビニよりも高い密度で湧水が存在する程である。その理由は、盆地ならではの地形にあり、松本市街を囲んでいる山々と、そこから流れてくる川からもたらされる豊富な水量が源となっている。水質についても「平成の名水百選（環境省）」に選定されるとともに、「名水百選選抜総選挙」においては名水部門第3位（平成27年度）と観光地としては素晴らしい実績を残している。

松本市等では、水をテーマに歴史や町並みを歩いて楽しめるように、①水の生まれる町（所要時間約35分）②時代とともに守られた水（同約30分）③お堀の水をたどる（同約20分）の三つのショートコースで19の湧水を紹介した「まつもと水巡り」マップを作成し、まち歩きを推奨している。コース上には、酒蔵や和菓子等、名水の存在が背景にあることを感じさせる特産品とも巡りあえる。食との出会いも、観光地にはあちこち観光客をターゲットとするものではなく、地元住民の日々の暮らしと直結していることから、観光地としての品格をも感じられる。

多様な体験プログラムの総合化を

本稿では、多様な水の特性を生かした観光まちづくりの先行事例の中で筆者が観光まちづくりに関わりを持たせていただいた一部の地域の事例からの学びを紹介した。

全国の多くの地域では、観光を通じた地方活性化が模索されており、観光客誘致に向けて競合し

つつある。話題性のために奇をてらった取り組みもみられるが、それは長続きしない。水辺の活用を考えるにあたっては、むしろ、地域の成立や履歴・暮らしぶりに学び、来訪者が希求しているものに近づくような水のもつ多様な姿を総合化したプロデュースが求められる。地域資源を再認識・再発見にあたっては、風土・暮らしぶりを再認識すること、歴史・史実から発見すること、喪失したものを再認識すること、マイナスイメージだと思っていたものをプラス志向で活用すること等から活用する地域資源に地域における意味合いを与え、それらを生かした個々の体験プログラムを「水」をテーマに総合化・パッケージ化することで、その地域にしかない新しい地域商品として創出・売り出すことができる。また、個々のアイデアの発意・発想は、地元の子どもたちや若者から募ることにより意外性のあるアイデアが生み出されることもある。地元自治体や観光関連団体、商工会議所や商工会等が全体をコーディネートすること、関係機関との調整役を担うことでひとつのアイデアが新たな地域商品・体験プログラムとして誕生するのである。

「持続可能な観光まちづくり」は、もはや定番のうたい文句となっている。本稿のテーマである「水」は器によって形を変える。水辺の観光まちづくりを進めようとする地域の足元には、観光まちづくりの源泉となる地域の成立や地域が歩んできた履歴・地域の記憶とともに、次の出番を待っている脈々とした水が流れている。水辺を生かした観光まちづくりを進めるには、水の脈を受け

止める器が、いま求められているのではないだろうか。地域の器の形に応じて、観光まちづくりを取り組む形態はさまざまであり、正解はないのかもしれない。地域の活力の源を受け入れる器づくりにこそ、まさに地域の個性が映り出されるのである。また、地域に流れる脈を手繰り寄せることで生まれる広域との連携への展開にも期待を寄せたい。

水辺を生かした観光まちづくりの新たな取り組みと持続的な展開に期待するとともに、見守っていききたい。

【参考資料】

- 九十九里町（2010年8月）「九十九里新創世記一片貝海水浴場無料休憩所100周年記念誌」
https://www.town.kujukuri.chiba.jp/cmsfiles/contents/000000/420/100.pdf
- 大下茂（2017年3月）「隅田川の記憶を読むー移り変わる風情に時の思いを重ねる」、すみだ地域学セミナー10周年記念誌（墨田区教育委員会）
- 大下茂（2011年2月）「行ってみたい！と思わせる「集客まちづくり」の技術」、学陽書房
- 墨田区（2015年4月）「墨田区観光振興プラン」
https://www.city.sumida.lg.jp/kuseijoho/sumida_kihon/ku_kakuyukeikaku/kankoushinkoupuran.files/sumidakuhoonpen.pdf
- 北区（2023年3月）「北区観光振興プラン2023」
https://www.city.kita.tokyo.jp/sangyoshinko/bunka/kanko/kanko/kankoshinkoplan2023.html
- 甘葉町（2013年3月）「織田宗家ゆかりの歴史的水路雄川堰・小堰」
- 松本市・松本観光コンベンション協会・新まつもと物語プロジェクト（2023年）「まつもとみず巡り」
https://visitatsumoto.com/w-p-content/uploads/2018/11/mizumeguri_map2023.pdf
shig-om@blue.ocn.ne.jp